

---

---

第5回  
震災と子育て支援

---

---

9月30日（月）10:00～12:30  
エル・ソーラ仙台 大研修室



**【報告】**

I. 「のびすく仙台」を拠点とした子育て支援活動

特定非営利活動法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク

代表理事 伊藤千佐子

II. すくすくルームからサロンへ

特定非営利活動法人 MIYAGI 子どもネットワーク

代表理事 亀岡留美子

III. 震災と子育て支援～「マザー・ウイング」の被災者支援活動

一般社団法人マザー・ウイング理事 小川ゆみ

【報告】

I. 「のびすく仙台」を拠点とした子育て支援活動

特定非営利活動法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク 代表理事  
伊藤千佐子



「せんだいファミリーサポート・ネットワーク」は、子育て家庭の支援を目的に2003年3月に設立、子育て支援に関わる情報の収集と発信、子育て相談、転勤族のための仲間づくりなどの事業を行っている。また、地下鉄広瀬通駅に隣接した仙台市ガス局ショールーム内にある「仙台市子育てふれあいプラザのびすく仙台」の指定管理者として運営を担っている。

2011年3月11日、「のびすく仙台」には約20組の親子が遊んでおり、託児室で5人の子どもを預かっていた。地震が収まった後、全員を外へ誘導してスタッフも含め解散。建物に被害がなく、水道、電気も止まらなかったため、仙台市と協議して4日後開館に踏み切った。ガス暖房は停止したため厳しい寒さだった。9日後には、「のびすく仙台」開館がテレビで報じられたこともあり、90人を超える親子が来館。「震災後、恐怖で笑えなかった子どもが笑い声を上げた」、「母親から離れなかった子どもが自分から手を放して遊んだ」など親たちの喜ぶ声が聞かれた。また皆が震災の恐怖や不安を話す場にもなった。その後支援物資が届くようになる。仙台は転勤族が多く、「のびすく仙台」を利用した後また転勤していった全国の人々からの支援申し出が多かった。スタッフは寄せられた衣類などを男女別、サイズ別に仕分けして被災地へ届ける活動も行った。

震災後1カ月経ってようやくガソリンが手に入り、支援物資を持って、以前からつながりのあった東松島市の子育て支援センター「ほっとふる」

を訪問。センターは津波被害を免れ、スタッフは懸命に支援活動をしてきたが、「子どもを亡くした多くの母親たちをどうケアしたらいいかわからない」という声が聞かれた。このため、「ほっとふる」と共催で女性のためのサロン「わたしじかん」を開始した。アロマやヨガ、ストレッチなどで体を動かし、フラワーアレンジメント、手芸、料理教室など趣味を楽しみ、あとはおしゃべりタイムでリフレッシュするという内容である。初回はヨガからスタートしたが、参加者は心と身体がなかなかほぐれず、予定の1時間をオーバーした。その後、月1回の開催を継続しており、参加する女性たちは徐々に心を解放できるようになっていった。講師は最初仙台から派遣していたが、そのうち地元女性のなかから、自分も資格があるので講師ができるといった人が現れた。2013年9月には石巻市でも「わたしじかん」がスタート。こちらは最初から地元の女性たちが主催者として運営している。

震災後3カ月頃になると、「のびすく仙台」に子どもを連れて遊びに来ている父親や母親たちの中に、些細なことで声を荒げる、子どもの叱り方が尋常でない、といった様子が見られるようになり、保護者支援の必要性を感じ、母親のための託児付しゃべり場を開催した。「自分たちは大した被害がなかったので弱音を吐いては他の被災者に申し訳ないと我慢してきたが、本当は怖かったし辛かった」との気持ちを話せる場になった。こうした震災後の経験を次の世代の母親たちに伝えたいと考え、200名にアンケートを実施して声を集め、専門家のアドバイスも加えて作成した防災用ガイドブック「子育てファミリーのための地震防災ハンドブック—大切な人を守るために今できること」を2011年9月に発行した。

震災後1年の時期には、福島県から仙台市に避難してきた母子のためのサロン「ママともサロン0123」を開始。福島県出身の先輩母親、臨床心理士、保健師に同席してもらい、母親たちが自由に話せる場をつくった。慣れない土地での子育ての不安、放射能の問題と偏見や差別の辛さなどさまざまな話をしながら生活再建に取り組んでいる。気仙沼市では、本吉地

区のグリーフケアの会「陽だまりの会」の立ち上げに関わった。地元の保健師を中心に月1回集まり、震災で家族、子ども、大切な人を亡くしたという人が語り合っている。

現在は、経済的な問題、家族の問題を抱えている家庭も多く、子どもたちが影響を受けている。震災の記憶に苦しみ、その苦しみと共存しながら生きる人々を見守ることが、私たちの役割だと考えている。

## 【報告】

### II. すくすくルームからサロンへ

特定非営利活動法人 MIYAGI 子どもネットワーク 代表理事  
亀岡留美子



「MIYAGI子どもネットワーク」は1998年12月設立。子育ては大変だったという思いと経験のある普通の母親たちが集まり、その子育て経験を次の世代に伝え、手伝いたいと託児を始めた。子どもの一時的預り、親子交流の場作りの子育て支援事業などの他、現在は、仙台市の児童館の指定管理者として、市名坂、小松島、鹿野、幸町南、原町の各児童館の運営を行っている。

震災直後は、「ワールド・ビジョン・ジャパン」の協力により、乳幼児のいる被災者に支援物資を配布した。物資の内容は、「幼児セット」として、幼児用布団1組、おむつ2パック、衣服、食器セット、歯ブラシ他である。メール配信を利用して必要な人へ呼びかけを行い、仙台市内各区の児童館5カ所と石巻市の牡鹿の保育所を拠点に延べ345セットを届けた。

その後、同じく「ワールド・ビジョン・ジャパン」の資金提供により、就労支援事業として東日本大震災で被災し、生後6か月～未就学児の子どもを持つ就職活動中の保護者を対象に「就労支援託児室 MIYAGI すくすく

ルーム」を2011年11月に開設した。場所は青葉区木町通のマンションの1室、開設日等は月～水曜日の9:30～15:30、定員は5名。4名の職員がローテーション制で対応した。利用理由は、面接、試験、資格取得準備がほとんどで、被災地から仙台市に転入してきた利用者が半数以上だった。利用者は、「被災のダメージが大きく育児が辛くなった」、「家庭で支え合う関係が崩れてしまった」、「1人で子育てを担うことになった」などの背景が伺えた。利用回数が重なってくると、保護者は子どもを預ける時や迎えに来る時に子育ての悩みなどを話すようになり、子どもは託児者に慣れて、それぞれにいい関係を築くことができた。

「すくすくルーム」の託児事業を共催してきた「ワールド・ビジョン・ジャパン」は当初長期支援を予定していたものの1年後の2012年11月に撤退した。しかし「MIYAGI子どもネットワーク」としては2013年3月まで継続することを決定し、就労活動中の人以外も託児条件なしに受入れ、開設時間も月～金曜日の17:00までと延長し、1時間600円の利用料金を設定した。その活動の中で、託児だけでなく、被災者が子育てで感じるストレスを和らげ、相談できる場も必要と感じ、「すくすくルーム」に新たに「すくすくサロン」を開設、親子が一緒に楽しめる、もの作りや料理などを企画した。2011年11月～2013年3月までの「すくすくルーム」利用は件数は96件あったが、その後の継続は難しく、3月末で閉鎖となった。

「すくすくサロン」は好評であり、まだ被災者支援が必要との判断から、2013年度は移動サロンとして、太白区の緑ヶ丘コミュニティセンター、青葉区のエル・パーク仙台、宮城野区の前町児童館を月1回のペースで巡回しながら開催している。地元の保健師がみなし仮設住宅に住む人たちに声かけをして周知をはかってく



れることも効を奏している。内容としては「ハンドマッサージとハーブティーでほっとリラックスタイム」「造形ワークショップ・モバイル作り」「親子deクッキング台湾料理編」「アロマ石鹸作り」などなどで、毎回5組～10組の親子が参加している。

また、復興支援イベントとして、2013年3月に人形劇団ブーク公演を主催したが、震災後心身ともにストレスを抱えている親子が、心から笑える機会となった。参加者は子ども97名、大人135名。今年度も開催すべく準備をしている。

震災から2年以上経って、被災者にはさらなる支援が必要である。生活に役立つ情報提供や気晴らしの場など、被災者の気持ちに寄り添いながら子育て支援を続けていくことが重要と考える。

## 【報告】

### III. 震災と子育て支援～「マザー・ウイング」の被災者支援活動

一般社団法人マザー・ウイング 理事 小川 ゆみ



「マザー・ウイング」は、未来を担う子どもたちを健やかに育むために、母親が自分らしく輝ける社会と地域を作ることを目的に、子育て家庭支援に関する事業を展開する団体として2008年9月に設立。2009年4月に開館した「仙台市子育てふれあいプラザのびすく泉中央」の指定管理者として運営している。

仙台市泉区は沿岸部に比べて震災被害が少なかったが、「のびすく泉中央」に来館する親子の様子からストレス、不安、疲れが通常より多く見られた。震災前後に出産した親には、震災によるライフラインの停止、交通網の寸断などで過度なストレスがかかり、子育てに対する不安が強かったケース、夫が震災後多忙となって育児のパートナーと

して頼りにくくなったケースがみられた。また、沿岸部や福島県からの避難者からは深刻な相談が多くなり、震災の影響で転居を繰り返した親子は不安と疲れがたまっていた。

こうした被災家庭を支援するため、2011年7月より「こども★はぐくみファンド助成事業」として「被災したママのためのグループケア」を開始した。「震災後気持ちが落ち着かない」、「子どもに接するのがストレスになる」という参加者同士で話を聞き合う場である。仙台で虐待防止活動をしている「キャブネットみやぎ」よりファシリテーター派遣の協力を得て月1回開催した。参加者よりもっと開催を増やしてほしいとの要望があり、2012年4月より月2回開催とした。5月には「ママのきもちトーク」と名称を変え、被災程度が軽い人も我慢せず気軽に参加できるように配慮した。同年8月からは月3回の開催となり、これ以降継続して参加する人が増えた。「ママのきもちトーク」に参加しているうちに、他の参加者の話を聞いて自分の感情を客観的に見ることができるようになったり、自分の気持ちを受入れてもらうことで孤立感が軽減したり、また自己肯定感を回復できるようになったりという変化が見られる。

2011年9月頃から福島県から避難してきた乳幼児親子が「のびすく泉中央」に訪れるようになり、友だち作りのイベントを単発で開催したが、その後もっと集まる場がほしいとの声があり、フリートークの場として「ふくしま絆ピーチ会」の立ち上げを支援した。さらにスタッフ提供型のお楽しみとトークサロン「ふくしまママの会 きびたん'S いずみ・たいはく」を実施している。福島県からの避難者は、当初夫が仕事のため福島に残り、母子のみ避難してきたが、その後夫も転職して仙台に移住するケースが増加している。しかし、そのような人たちの中には「夫または妻が仕事を辞めて避難してきたため経済的な不安がある」、「仙台への転入者が多く、望む広さの住居が見つけにくい」、「自主避難した人で福島に帰らないと決めた人が増加している」といった現状がある。親子の精神面では、母親のイライラが収まると子どもも安定するが、生活環境の変化や子どもの成長に

より再び不安定になることを繰り返すという傾向がみられる。「ふくしまママの会」で同県出身者がつながり、知らない土地での子育てに関する不安をやわらげることができているようだ。

2012年6月からは、「セーブ・ザ・チルドレン」と「ホーム・スタート・ジャパン」より助成を受けて「ホームスタート・仙台いずみ」事業を開始した。これは泉区を対象地域に、未就学児童がいる家庭に研修を受けたボランティアが訪問する家庭訪問型子育て支援事業である。子育て経験のある女性のボランティアを養成し、2013年2月より本格的に訪問を開始した。家事や育児、買い物や散歩などを一緒に行って、親が心の安定を取戻し、地域の子育て施設へ出かけられるよう支援している。訪問を重ねる中で信頼関係を作り、実家の母代りともいえる役目となっている。

被災地支援として始められた事業は、実はどの地域でも有用な子育て支援策である。被災地の親子から全ての母親たちにつながるよう、息の長い活動にしていきたいと考える。